

誇り高く



吉田 亮

東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻
[113-8656]東京都文京区本郷7-3-1
教授, 博士(工学).
専門は機能性高分子ゲル.
ryo@cross.t.u-tokyo.ac.jp
http://cross.t.u-tokyo.ac.jp

研究することを職業・仕事としている以上、社会に貢献する、価値のある研究をしたいものである。ただ、研究分野によっても多様な考え方があり、何に価値を見いだすかは研究者により千差万別であろう。社会に貢献すると言っても、実用化や製品開発といった目に見えて直に役立つものから、基礎となる技術を創る、コンセプトを創る、理論を構築するなど、基盤技術や学理の確立という観点からの貢献もある。

いずれにせよ、そこには研究者としての誇りがあるべきだと思う。自分はこの研究に関して最先端を走っている、パイオニアである、ほかとは違うということを誇りに思えるような研究をしたいものである。研究者の多くはその誇りを追求するためその道を選んだのではないだろうか。

しかし、いろいろ多くの研究を見たり聞いたりする中で、そういうものがあまり感じられないような場合もある。たとえば、既往の研究を追従しているだけのように見える穴埋め作業的な研究はそうかもしれない。また、組み合わせを変えることでアイデアは出ても、単なる既存概念の線形的な和であって、高次の概念にまで昇華しきれていないものも多い気がする。とくにアカデミックの立場からはそういう類の研究はあまり魅力的ではない。

学術分野や領域が多様化した現在、本当の意味でオリジナルな独創的研究をするのは難しい。またそれを評価するのも難しい。一見最先端を走っているように見える研究でも、他分野から見れば既知の概念や手法であったり、過去に誰かが行っていた研究の焼き直しであったりすることも多い。なぜこの雑誌にこの論文が、と思うようなこともある。

そういう意味で、何が独創的であり先駆的なのかを

自身で見分けることのできる目を磨きたいものである。そのために知識は必要であり、そしてまた、その分野の歴史を知ることも重要である。また学生には、そういう目を養ってほしいということを常々言っているつもりである。学生は、ある程度ルールが敷かれたうえで研究を行っている。たとえ素晴らしい研究を行い評価を受けたとしても、それはその研究室の思想が背景にあるものであり、本当の意味での個人評価ではないかもしれない。それは若手の研究者にも当てはまるかもしれない。研究者としての真の評価に晒されるのは、研究者として完全に独立した立場になったときで、そのときいかにこれまでと違う独創的な研究、革新的な研究ができるかが勝負である。そのとき、そういう目を日頃からもっているかいないかが非常に重要である。

また、良い研究にはその研究者の哲学があり美学があるように思える。何を美しいと思うか、そこに、なぜ研究者がその研究をやっているかの根本がある。性別や年代に関係なく、研究者の個性が最もあらわれるところである。たとえば化学の分野でも、分子構造そのものを美しいと思うのか、規則正しく分子を並べることが美しいのか、集まった構造が美しいのか、集団としての秩序的な振る舞いを美しいと思うのか、静(平衡)が美しいのか動(ダイナミクス)が美しいのかなど、美の対象は限りない。

したがって、研究者の誇りを感じる研究を見たときは芸術作品に触れたように感動する。研究者とは言え芸術家のようなシャープな感性をもつことが大事、そのためには私事も大事、プライベートでも感性を磨く時間が必要だと思う。ただ、なかなか時間が取れないのが現状であるが…。